

修士論文(要旨)
2014年2月

Erikson のいう成年期の発達課題
ー ジェネラティビティとそれに影響を及ぼす要因についてー

指導 山口 一 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
212J4005
門倉章代

目次

問題と目的	1
方法	1
結果と考察	1
引用文献	i

I. 問題と目的

中年期の発達課題であるジェネラティビティは創造、世話、世代継承から構成される(McAdams et al, 1992、丸島, 2005)。しかしそれを達成するための要因を調べた研究はほとんどない。中年期は心理的危機を経験することも多い(Levinson, 1978、岡本, 1997、高井, 2000)。小塩(2002)は困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果のことをレジリエンスと呼び、ネガティブなライフイベントを経験しても、その経験を自己の成長に生かし、乗り越えていく過程を理解するために、レジリエンスの概念が有効だと述べた。さらに吉田(2001)は困難を乗り越える原動力として、主体性だけではなく心情や誇り、気力のようなものの存在を指摘した。高井(1999)は、Frankl(1972)の実存分析理論に基づいて、人が生きていく上で、自分の人生に自分なりの意味や目標を見出していることや、自分の存在に価値を見出すことが、人生を前向きに、積極的に生き、毎日の生活を充実して生きることに繋がると述べた。そこで中年期の発達課題であるジェネラティビティの達成に影響を及ぼす要因として、レジリエンスと実存的生き方に着目して調べることにする。

II. 方法

40歳～75歳までの男女で、首都圏A市の市民講座に参加した一般成人、首都圏の企業に勤める研究担当者の友人とその友人、知人168名を対象に質問紙による調査を行った。質問紙は、①フェイスシート、②串崎(2005)のジェネラティビティ尺度、山口(2013)の中高年齢者レジリエンス尺度、③高井(1999)の改訂版実存的生き方インベントリー、④岡堂(1993)の改訂版PIL(人生に生きる意味、目的を見出し充実して生きている)態度スケールで構成された。

III. 結果と考察

ジェネラティビティ尺度と中高年齢者レジリエンス尺度、および実存的生き方インベントリーの各下位尺度間の相関を調べた(Table 1)。

Table 1 ジェネラティビティ尺度の下位尺度と他の尺度との相関

ジェネラティビティ尺度の下位尺度		次世代への 責任感と関心	独創性・創造的 活動への意欲	脱自己本位的 態度	自己成長・ 充実感
レジリエンス尺度	課題解決力	0.40***	0.52***	0.07	0.37***
	体験共有力	0.28***	0.08	0.13	0.38***
	気分転換力	0.21***	0.28**	0.15	0.52***
実存的生き方イン ベントリー	個を迫及する 生き方	0.30***	0.45***	-0.03	0.31***
	関係性重視の 生き方	0.51***	0.40***	0.02	0.46***
PIL・態度スケール		0.34***	0.33***	0.04	0.58***

** p < .01, *** p < .001

この結果からジェネラティビティはレジリエンス、実存的生き方と関連があることが示された。また各下位尺度の年代別の差では、脱自己本位的態度、自己成長・充実感、および気分転換力が40代より60代以上が有意に高い得点を示した。今後はジェネラティビティとレジリエンス、実存的生き方インベントリーの3つの尺度の各下位因子間の因果関係を調べて、どの因子がジェネラティビティの本質である他者の世話をする因子と関係しているのかを調べるのが課題である。

引用文献

- Erikson, E.H. (1950) *Childhood and Society*. 2nd ed. New York: W.W. Norton & Company, Inc.
(エリクソン, E.H. 仁科弥生(訳) (1977). 幼児期と社会 1. みすず書房 pp.343-353.)
- Frankl, V.E. (1972). *Man's Search for Meaning, An Introduction to Logotherapy*. Wien, Verlag Hans Huber.
(ヴィクトール, E. F. 山田邦男(訳). (2004). 意味による癒し ログセラピー入門 (株)春秋社 pp.3-139
- 串崎幸代 (2005). E.H.Erikson のジェネラティビティに関する基礎的研究 - 多面的なジェネラティビティ尺度の開発を通して-. 日本臨床心理学会誌, 23, 197-208.
- 岡堂哲雄 (1993). 生きがい PIL 研究会編. 河出書房新社 pp.3-12
- 岡本祐子 (1997). 中年からのアイデンティティ発達の心理学:成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味. ナカニシヤ出版 pp.170-176
- 岡本祐子 (2002). 成人女性のアイデンティティ発達に関する研究 III:「個」と「関係性」から見た中年期危機の現れ方とその解決の方向性. 日本心理学会総会発表論文集, 7.
- 岡本祐子 (編著) (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程. ミネルヴァ書房. pp. 45-57, pp.121-147, pp. 175-181
- 小塩真司・中谷泰之・金子一史・長峰伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 -精神的回復力尺度の作成-. カウンセリング研究 35, 57-65
- 高井範子 (1999). 実存分析的視点による生き方態度の発達の研究-実存的生き方態度インベントリ- (EAL)による検討. 大阪大学教育学年報, 4, 101-114.
- 山口 一 (2013). 精神障害者の家族の困難度・負担と援助ニーズに関する調査 - 調査 I 家族の困難・負担とそれを減じる要因としてのソーシャルサポート、レジリエンス報告書. 1-32
- 吉田 毅 (2001). 競技者の困難克服の道筋に関する社会学的考察:主体的社会化論を手がかりに. 体育学研究, 46, 241-255.